

おだわらライブラリー通信

小田原の文化資源を発掘する◆小田原市民会館のストーリーを紡ぐ

第六号

小田原から世界へ響く音楽、その源流

長らく小田原市民の文化拠点であった小田原市民会館も、令和3年7月末にその59年の歴史を閉じることになりました。閉館記念事業として、令和3年3月27日に「ありがとう市民会館まつり」が行われます。小田原市民会館のストーリーを紡ぐ「ライブラリー通信」も、閉館記念事業の一環として発行します。

僕の舞台デビューは、小田原市民会館なんです。
栗田博文さん（指揮者）



僕の舞台デビューは、小田原市民会館なんです。幼稚園の帰り道にある楽器店に飾ってあるピアノを見ていたら、父が「これやるか？」って、それが音楽との出会いでした。市民会館の小ホールでピアノ発表会をやって、ペダルに足が届かなくてブラブラさせながら弾いていました。

小学校の頃には、小田原少年少女合唱隊にも参加していました。声変わりをし辞めてしまいましたが、代表の桑原妙

子先生には大変お世話になりました。

白山中学校ではブラズバンド部。中学2年生のとき、部活の先輩

から「小田原市民会館にNHK交響楽団が来る」と誘われたんです。若き日の尾高忠明先生の指揮で、全曲ベートーヴェンのプログラム。それで、ぶつとんじやった。『エグモンド序曲』、ピアノ協奏曲第5番『皇帝』、それから交響曲第3番『英雄』。この瞬間、僕は指揮者になる！と決めてしまいました。

高校生のとき、神奈川県民ホールに小澤征爾先生のポストン交響楽団の演奏を聴いて、今度は「崩壊」。大きなホールの遠くの席なのに、目の前で音がする。それでも、それまでのことが崩壊してしまったように、ますます音楽に夢中になりました。

家にステレオがあって、オーケストラのレコードを聴く環境がありました。だから、「生の演奏に触れる」という体験がとっても衝撃だったんです。オーケストラは大勢の演奏家が目の前にいて、それが目の前でドーンと音を出す。その感覚、集中力がすごい、と思いましたが、レコードでもテレビでも、今はイン

ターネットでも演奏を観ることができますが、人間の行為で成り立っている音楽。その「生のものに出会う」ということに感動しました。

指揮者になりたい、音楽大学に行きたいと親に話したんですが、なかなか許してくれなくて。とりあえず小田原高校に進学して管弦楽部に入部しました。ただ、新入生がいきなり「指揮者やりたい」なんて生意気なので、チェロをやりながら、だんだん「先生、全曲指揮をされるのは大変ですが、僕が替わりましようか？」なんて、交渉術も学びましたね。（笑）

今、音楽大学で教える立場でもありますが、学生たちや若い皆さんには「本当に心からやりたいことを見つけてほしい」と願っています。すぐに見つかるわけではないですが、自分の人生のメインになるようなものに出会えることが大事だと思えます。

（平成27年1月6日『宝くじ文化公演 神奈川フィルハーモニー管弦楽団ニューイヤークンサート』広報記事を再録しました）



平成27年1月、宝くじ文化公演 神奈川フィルハーモニー管弦楽団ニューイヤークンサートで指揮をふる栗田博文さん

大ホール壁画の謎

大ホールのホワイエの壁面が、壁画であることをご存じでしょうか。

1階が赤、2階が青と、対照的に塗り分けられたこの壁画。長い年月のうちに剥落し、看板やベンチで隠れてしまっています。壁の隅には「Yasushio Nishimura」のサインがあり、ひとつの「作品」であることが分かりました。

この作者について市職員が調査したところ、1964年に結成された美術家の集団「主体美術協会」に所属して活動された西村保史郎さん（1915-2015）が描かれたものであることが分かりました。今も活動を続ける主体美術協会の方に確認していただき、会報誌にも掲載されました。

西村さんは壁画のような抽象画の他、児童書の挿絵や紙芝居なども手掛けておりました。世界の偉人伝の表紙も描かれていたようですので、知らずのうちに目にしたことがあるかもしれません。

西村さんがどのように依頼され、何をテーマに市民会館の壁画を描かれたのか、記録が残っておらず、未だ謎のままです。

昭和40年に本館が完成し、大ホール棟を国道側の正面から視ることはできなくなりましたが、赤と青の壁画が透けて見えるガラス張りの建築は、昭和中期にはかなりモダンでお洒落な外観だったのだろうと想像が膨らみます。

（上）階壁画
白くなっている部分は
塗りが剥落したところ
（平成30年撮影）



（下）開館当時の2階壁画
ベンチや灰皿もモダンな
デザインになっている



「笑顔でいられる場所」を大切にしたいと思います。
稲子紀夫さん（小田原文化サポーター顧問）



生まれも育ちも小田原です。根府川に13代続くミカン農家に生まれて、10人兄弟の8番目でした。片浦小、片浦中で少年時代を過ごしました。自宅には手回し式の蓄音機があり、朝、目覚まし代わりに音楽をかけていました。たくさんレコードがあり、クラシック、歌曲、童謡、マーチ、浪曲、物語など、自然と音楽に馴染んだ子ども時代でした。

大学ではハンディキャップの無いライフル射撃部に所属しました。猛練習の末、直ぐにレギュラーになり、団体として関東や全国優勝に貢献し、東京オリンピックの候補選手として合宿にも参加しました。部員がみんなクラシック好きで、飯田橋にあった名曲喫茶に入り浸り、コーヒー1杯で1日中粘り、授業の前後にはカフェでレコード鑑賞。オペラも好きで、コンサートには年に何度も行きました。

昭和40年、小田原市役所に入庁しました。最初の配属は福祉課の施設係。「公益質屋」の管理を担当しました。ところがその後、肺の病気にかかってしまい、2年半、療養のために休職すること

となりました。市立病院にいたますが、その後秦野の国立病院に転院。手術をして、左肺の上葉部を切除しました。同期からも仕事で遅れて追いつけず、一生のハンデを背負ったと感じました。ある時テレビで「この病気の人は50歳ごろに呼吸器不全で亡くなる可能性が高い」と放送していたのを見て不安になり、なるべく長生きしよう、と思いました。

復職してからは、教育委員会の総務課で、東富水小、矢作小、富士見小など、鉄筋コンクリートへの新設、建て替え工事計画を担当しました。異動して、水道局庶務課。水を作って売る、営業する仕事は楽しかったですね。その後は福祉に戻り生活保護の担当になり、約110世帯担当しました。母子家庭や高齢者、生活困窮者の担当をしました。

それから、老人福祉係長になりました。「いそしぎ」を建設したのもこのころです。高齢化が問題になりはじめる頃で「高齢化社会研究委員会」が設立され、委員から介護施策だけでなく生きがい施策の提言を沢山頂きました。65歳以上人口が総人口の75.14%を高齢化社会と言われますが、「要援護（独り暮らしや寝たきり等）老人」にならないことが大切、と意見具申して、今も運営する「いそしぎ」の建設計画を採用して頂きました。平成になってからは社会課の課長補佐に転任し、部落差別問題の担当になりました。

その後、社会教育課へ異動。「開かれた市役所」を目

指していた時期で、ロビーコンサート、文学館の整備、駅前スペースの整備を担当しました。

市役所2階のロビーコンサートでは、第1回目をヴァイオリンの白井英治先生に出演していただきました。

また「出前講座」は全庁に呼びかけ制度化し、「自分時間手帳」創刊にも関わ

り、今でも続く冊子となっています。「シルバー大学」の開校もこの頃です。3年間の履修期間がある講座で、運動会や遠足、文化祭もあり、受講者は学生時代に戻ったようだと大変な張り切りようでした。老人福祉をしていた頃に考えた、「60代からも元気で活動する場を作る」という精神を社会教育でも引き継いで、実践した成果だと思いました。

在任中には、県行政センターが主催し、近隣の1市3町が合同開催する「西湘音楽フェスティバル」が開催されました。小田原市民会館を会場に、自分が実行委員を勤めました。この仕事を通じて

様々な市内外の音楽関係者と知り合いになり、手伝いに誘われて現在でも交流が続いています。

市政50周年の「ときめき小田原まつり」の一環として、東京電力提供の「TEPCO音楽祭」も実施。指揮は小田原出身で、若き俊英の栗田博文さん。作曲家の石井欽さんもご存命で、オペラ「女はすてき」なども上演しました。

市職員として最後には、生涯学習部の部長になりました。ここでは「全国



市役所ロビーが
コンサートホールに

「ロビーコンサート第1回」
広報おだわら
平成5年7月15日号より



↑西湘音楽フェスティバル
広報おだわら
平成5年10月1日号より



↑TEPCO小田原音楽祭
広報おだわら 平成2年9月15日号より

童謡フェスティバル」を開催しました。石井欽先生を中心に、中田喜直先生や絵本作家のこわたたまみさんら、錚々たる方を審査員にお招きしました。中田先生は最晩年で体調が悪く、小田原に来ることなく亡くなったのが残念でした。

このフェスティバルから「ねじみがかじる」などの歌が小田原市発の童謡として生まれました。桑原妙子先生が指揮する小田原少年少女合唱隊に歌っていただき、CDとして録音されました。全国から作品を募集し、先生方に審査していただくフェスティバルの運営も大変な苦労がありました。

平成5年8月に小田原市の市政方針「21世紀プラン」が策定され、市民会館の建て替えを含む三の丸地区の整備構想がありました。それを受けて市内やゆかりの音楽家たちが立ち上がり、「小田原室内合奏団」を設立したのが始まりです。新しいホールができれば、水戸市や金沢市のように、座付きのオーケストラが欲しい、という夢がありました。

ヴァイオリンの白井英治先生が発起人となり、フルートの湯川和雄さん、井上楽器の井上忠彦社長がサポートしてました。平成8年には、ドイツから東京藝術大学の講師として来日されていたゲルハルト・ボッセさんに、小田原室内合奏団の指揮を依頼しました。年3回、コンサートを市民会館で行いました。観客は会員制で、会費は月1千円。10年間、活動継続しましたが、エマニユエル・バツハなど、玄人向けの曲が多かった気がします。当時の会員は、演奏会がある日は、お洒落して出かけるくらい格調が高く、演奏も素晴らしいとの感想を多くいただきました。

その後、一度方向性を見直す、ということで「小田原楽友協会」に名称変更をしました。プロモーターとしてコンサートを企画し、上質な音楽を仲間と楽しむ、というコンセプトでした。コンサート制作会社と交渉して、年4回の公演を実施しました。第42回公演では、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団の、フォルクハルト・シュトゥウイデ氏率いる弦楽四重奏団を招聘しました。



広報おだわら 平成9年11月15日号より
特集記事には堀江事務局長や白井代表の意気込みが掲載された

「小田原楽友協会」となった近年では、仲道郁代さん、天満敦子さん、奥村愛さんや松田里奈さんなどの都内でも人気の演奏家をお呼びしていましたが、都内のコンサートでは満席になるような企画も、小田原では満席にならない。会員の減少もあり、予算的にも厳しくなりました。全会員にアンケートを取って、楽友協会としての活動も終了することにしました。22年3か月の間、71回の定期公演と、9回の音楽フェスティバルに関わりましたが、平成30年（2018年）3月に幕を下ろしました。会費の残額は、会員の了承を得て小田原市のふるさと文化基金に寄付させていただきました。

市を退職してからも20年経ちますが、音楽活動の支援などにエネルギーを注いできました。文化芸術の良いところは、皆さんが笑顔になることが素晴らしい。その根底には、若い頃の病気で休職した経験から、恩返しだと思ってるんです。こういう時代だからこそ、人の役に立つ、笑顔が見られる場にいられることが良いですね。

楽友協会として、今も続く「市民による音楽フェスティバル」立ち上げにも関わり事務局を担いました。元々は、指揮者のコバケンこと小林研一郎さんとベーターヴェン「第九」を歌う企画でした。平成17年5月に小田原地区合唱連盟、音楽連盟、楽友協会が合同し、市もオプザーバーとして準備会を立ち上げ、白井英治さんが実行委員長になり、桑原先生や松本敦子先生も委員に加わっていただき、アーティストも地元活用を掲げながら企画を進めました。第1回目は平成19年3月25日の演奏会。翌年、小田原市も共催に名前を連ねて、「市民による音楽フェスティバル」と名称も変えました。当初から

ずつと「新ホール建設応援イベント」と銘打って毎年実施してきました。毎回多くの合唱参加者が、プロのオーケストラと協賛分歌うことができると楽しみにしています。最盛期の「小田原室内合奏団」の会員数は500人くらい。市内外の企業などのスポンサーも多くついていただきました。

市民会館などでイベントをやる際に、有償で受付やお客様対応のお手伝いをするボランティア組織「小田原文化サポーター」設立のきっかけも、コバケンさんの「第九」のときでした。それまでは接客接遇の経験がありませんでしたので、せっかくな世界のコバケンが来るのだからサービスも向上したいと思ったのがきっかけです。レセプションのノウハウがなく、市に相談して「レセプションニスト講座」を開催していただきました。研修期間を経て、有償ボランティア団体として独立し、設立当時のメンバーが今も頑張っています。



2018年、「小田原楽友協会 22年の軌跡」より
国内外の錚々たるアーティストがラインナップされた。

「レセプションニスト研修中の稲子さん」
「稲子さん制作の記念品。ジャケットやブックレットのデザインも凝っている」



↑レセプションニスト研修中の稲子さん
↓稲子さん制作の記念品。ジャケットやブックレットのデザインも凝っている





ジャズピアノリストのマル・ウオールドロンが、81年のアルバム「NEWS/RUN ABOUT MAL」発売記念に来日、小田原公演に高校の同級生と行った。マルは、登場すると小ホールの床に置かれたピアノに向かい弾き始めた。

わかったふりをしていたが、重苦しい長い曲が辛くて、「Flea for two」などの軽快な曲になると救われたような気持ちになった。前のお客の頭の隙間から、マルの頭頂部がちらちら見えるだけで、ピアノを弾く手元どころか顔すらも見えなかったが、今、マルが目の前で弾いている、という感動だけはあった。ピアノは持ち込んだはずなのに、小ホールのロビーの窓から入れたのかなあとは、かなり後になってから思ったことだ。

よしだたくろうのギター一本の弾き語り、通路にも観客がびっしりの今なら許されない超満員だった。RCサクセションには、3回は行った。難聴になりそうな音量だった。当時のパンフレットは今も手元にある。(アーカイブ隊 諸星)

“市民会館思い出メッセージ”から

人形劇、書道教室の展覧会、書道コンクールの表彰式、小学校の音楽会、そして成人式など子どもの頃から大人になるので、とてもお世話になりました!!

市民会館は自分にとっておめでたい時に使う特別な場所であり楽しい思い出ばかりです。

新しい小田原三の丸ホールも音楽、芸術や各種式典などで広く活用され多くの人の思い出に残るようなホールになることを願ってやみません。

ありがとう市民会館!!

F.O

私にとって市民会館は、青春の思い出の場の一つです。高校2年の秋、学校の音楽祭が、ここ市民会館で行われました。

こちらからは告げずとも、心の中では気になり続けていた人と、たまたま隣りどうしの席で見ることになりました。どんな言葉を交わしたかは覚えていませんが、自分にはキラキラ輝くような時間だったと思います。遠い遠い日の思い出となりましたが、消えることはありません。

本当に長い間、お疲れさまでした。

ありがとうございました。

おだわらっ子

息子が中学2年生の冬に小田原市に引越してきました。転校前は部活動で毎日バイオリンを弾いていました。

春になり、小田原ジュニア弦楽合奏団の演奏会で初めて市民会館に、「パッヘルベルのカノン」を合奏させていただきました。

調弦を手伝っていただき、舞台上上がるまでの緊張感。演奏中の真剣な表情。ステージを降りるときに少し照れくさそうな様子...とてもよく覚えてます。

息子は、今、エレキギターに夢中です!

小田原市民会館 音楽の愉しみをありがとう!!

しみんかいかんありがとう

みどりようちえんで、はなぐみさん

つきぐみさん ゆきぐみさんで

おんがくかいをひらいていました。

3ねんかん ありがとうございました

おだわらライブラリー通信第六号

- 発行 小田原市 文化部文化政策課
- 令和2年度文化創造活動担い手育成事業「市民会館閉館記念事業」報告書
- 編集 市民会館思い出アーカイブ隊 池田啓司・高橋茂樹・深野彰・諸星正美・富士原直也
- 資料提供/特別協力 (株)ムジカ・キアラ 小田原楽友協会 小田原市 広報おだわらアーカイブ
- 印刷 令和3年3月吉日
- 問合せ 小田原市 文化政策課 〒250-8555 小田原市荻窪300番地 電話 0465-33-1706 / FAX 0465-33-1526



このコロナの時代(令和3年3月)、あらためて『集う』ことの大切さを痛感します。市民会館は、昭和37年開館ですが、昭和30年代前半からの公会堂建設の運動の延長線上です。当時は戦後の混乱が落ち着きつつあるとは言え、庶民はお寿司やバナナは、特別な日しか食べられない時代です。その中で人々は日々の生きる糧を求めて『集う』ことで絆を確認していたと思います。

音楽はその『集い』に欠かせない存在であり、演劇は人々の普段の生活では蓋をしている心根を吐露する叫びで有った筈です。人々は、各地区の公民館や学校等で『集い』、時には『祭り』を楽しみながら、暮らしの課題等を相談していました。

まだ日々の生活も楽では無い中で、より多くの人達の『集い』を可能とする場を切望して出来たのが市民会館でした。新しい三の丸ホールは、その『想い』を引き継いでいくものでありたいものです。(アーカイブ隊 高橋)



旅ゆけばあー、相模の国の小田原に、一筋伸びゆく東海道、これに沿いたる街並みの、中にそびえる殿堂が、今宵の舞台よ会館よおー。てな調子で、虎造さんもうたつてくれたのかなあ。

かつて小田原にも浪曲があった。明治大正昭和の、大衆芸能のその中で、絶大な人気を誇ったのが浪花節、浪曲だ。大正時代には専門の寄席もあり、名の知れた浪曲師たちがこの地にやって来た。戦後、ラジオ放送で全国的な人気を誇った演者たちは各地に招かれ、自慢の声で人々を大いに酔わせた。

小田原市民劇場でも浪曲大会は大人気。昭和50年ごろまで行われた。人気浪曲師は、同日に複数の浪曲会と契約。昼、小田原で出演後、電車で移動。東海道線沿線各所で演じて、夜も東京の寄席で演じたという話も残っている。

幼女から老剣士まで演じ分ける七色の声の伊丹秀子、大当たり灰神楽三太郎の相模太郎、歌



謡浪曲で一世を風靡した天津羽衣、御存知「紺屋高尾」の篠田実、など公演広告には当時の売れっ子の名が散見する。東家三楽「左甚五郎小田原宿の話」もある。海道一の宿場町小田原を舞台とした演目、是非聴いてみたい。

世に忘れられて久しいというが、どっこい浪曲は生きている。平成30年1月、四十年ぶりに、浪曲が会館小ホールにやって来た。「相州小田原語り道・玉川太福浪曲会」である。玉川福太郎の最後の弟子にして、関東節の正統を受け継ぎ、滑稽味を巧みに加えつつ、自ら創作する斬新な演目で若い聴衆も魅了する。浪曲の未来を体現する玉川太福は、この地で演じた先達たちに思いを寄せ、レトロ感満々たる舞台で唸る。うなる。「声」「節」「啖呵」、浪曲の醍醐味を發揮して、観客二百人を存分に楽しませてくれた。「待ってました!」さあ、小田原で浪曲。これからも「たっぷり!」

(文化レポーター 備堂能満)